

壇の中央に鎮座するのは、ひとさわ華麗な内裏雛。  
理想の夫婦像を表現しているといわれる。



**も**うすぐ雛祭り。春間近のこの時期は、日本中が華やかな空気に包まれるが、ここ信州北部の須坂でも街全体が桃の節句一色に染まる。江戸時代は須坂藩の陣屋町として、明治から昭和初期にかけては製糸業の街として栄え、当時の繁栄を偲ばせる土蔵や商家の建物が今も数多く残る。歴史ある街には、伝統行事もしっかりと土地に根づいているということだろう。その須坂で最大のイベントとなつているのが、須坂アートパークで開催中

の「三十段飾り千体の雛祭り」(4月16日まで)だ。今年で11回目を迎えたこの催しでは、パーク内にある3施設に計約6000体の雛人形を展示。なかでも注目を集めているのが、「世界の民俗人形博物館」に置かれた、ご覧の30段の雛飾りである。大勢のカップルが集まることから「恋人の聖地」にも認定されている同パークらしく、壇上には雪洞がハート型に配置されている。そして雛人形と雛道具がびっしり。博物館学芸員の広田華子さん(30)に

よれば、人形は毎年違うものが飾られるそうで、今年も平成に入って作られた内裏雛を中央に置き、その周りに昭和50年代制作の計約1000体を並べたとか。いずれも全国各地の家庭から寄贈されたものだという。「同じ昭和50年代とはいえ、制作された地域によって、それぞれ目つきや表情、装束の着付などが異なります。そうした違いも楽しみながら、この須坂で春の気分にあたりたいと思えばと思います」(広田さん)

30段の壇上に  
平安貴族が  
大集合!

高さ約6尺、幅5〜7尺の雛壇は30段飾り。実に約1000体の雛人形が並び、展示会場の須坂アートパークは恋人の聖地として知られ、雪洞でハートをかたどっているのもこの場所ならではの

